

転生先は…光の線を描  
きもの

きさらぎ たつよし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼は一つの死を迎えると再び生を待つこと。

幾千の数の転生の中…彼はある世界の生き物として生まれ変わる。

それが世界の意思なのか、単なる偶然なのか。それは誰もわからないお話。

# 目次

天文学的な確率のイレギュラー	1
形とは時間をかけて作り上げるもの	
26	
合わせる身体	53
繋がりと言う糸	67
希望に満ちた糸、その色は…	85



# 天文学的な確率のイレギュラー

世界とは幾つあるのだろう。

AとBの世界。

表裏の世界。

時間軸の世界。

並行世界。

天文学的な数の世界が、この世には存在している。それを管理する神がいるのかは

…誰も知らない。

そんな数の中に、一つの世界である人間が過去に戻っては繰り返す世界があった。



世界には歴史があり未来がある。宇宙が誕生して、様々な新たな星が生まれては死に：凄まじい時間を経て広大な空間が広がっていく。

その工程を進んでいくのが過去になり歴史となり、未来に繋がっていく。そんな中に将来、生物が生きていくのが最適な星が誕生する。その星は地球と呼ばれた。

地球には、生物として頂点に近いものが誕生した。それは人間であり、動物を殺しては食べ自然の一部を削り文化を築いていた。

人間の歴史は殺し合いに奪い合いが当たり前だった。血が血で洗い、増えては減る

のを繰り返す。

そして、人間は動物や自然の一部を奪い絶滅や消し去る事を続けていた。人間とは欲が強く、不合理な生物と言っても過言では無かった。しかし、そんな中で世界は動いているのが確認できる事が起きる。

☆☆☆☆

西暦1944年、その年にまた一つ歴史に残る争いが終わった。

同じ人間による争いで夥しい数の人間が死んだ。国と国が争い、大切な人や恋人など色々な人は戦いに巻き込まれては死んでいった。涙、汗、血、尿、糞、様々な物を流しながら。だが、時間が過ぎれば再び人間は増え始める。

1950年、戦争と言う争いが6年が経つと人間は戦いから未知の世界に興味を向ける。

1958年、人間は地球以外の星に目をつけていた。その星は火星だった。人間は衛星を作り上げており、米国調査衛星『ヴァイキング1号』を火星に到達させた。人類にとって初めての他の星に調査を行った。

それが事の始まりだったのだろう。

衛星は火星に存在した生物らしき影を映しては、地球に映像データを送信した。それを見た人間は、軌道上からの観測で火星には生物が存在すると確信した。

翌年には、火星に存在する『火星起源種』に関する調査に力を入れ始めた。そして、特務機関『ディグニファイド12』が結成。

1966年、少しずつ人間への脅威が近づいてきていた。

特務機関である『ディグニファイド12』は改編・拡充。地球外生命体とのコミュニケーションを行う為と目的とした対話計画である『オルタネイティブ1』を開始した。1967年、この年に人間は恐怖する。

国際恒久月面基地「プラトーン」にて地質調査チームが月面で火星で確認された生物と同種の存在を確認した。それが本当の始まりだった。人間は…その生命体とファーストコンタクトを取る事を図るが、コンタクトが取れず襲撃され月面に送られた

調査隊は絶滅。

後に、その生命体を国連で『人類に敵対的な地球外起源種』と命名。縮めて『BETA』。

1968年、『オルタネイティブI』は破棄となり新たに『オルタネイティブII』を開始された。

1973年、人類は地球にBETAの侵略を許す。4月19日、中国にBETAを搭載したユニットが飛来。そして初めてとして最初の巣である『ハイブ』が誕生。

それから人類とBETAとの戦いが始まってしまった。人間達は、幾多の手段を使って撃退を行うが：BETAの脅威により失敗。そして、BETAには様々な個体が産み出されては人類は制空権を奪われてしまった。

☆☆☆☆

長い時間が過ぎる中、未だ人類とBETAは争いを止めない。人間は、自分達の存亡をかけて戦いBETAは自然や命を奪っていく。

最早、人間は奪われる側になっていた。

しかし、この世界には『イレギュラー』が発生していた。

人類の敵である『BETA』には種類が確認されていた。

戦車級。(タンク級)

闘士級。(ウォリアー級)

要撃級。(グラップラー級)

突撃級。(デストロイヤー級)

光線級。(レーザー級)

要塞級。(フォート級)

他にも確認されていないのか、まだ種類はいると思われている中で人類から制空権を奪った奴がいた。

それが光線級だった。

見た目は、どのBETAも生理的嫌悪感や本能的恐怖感を襲わせるが光線級は…巨大

な目を持ち二本に繋がれたような管を通して毛のような生えた身体を持つが二足歩行であるが腕は存在しなかった。

脅威なのは、巨大な目から放たれる光線である。対空戦闘や遠距離用に産み出されたと思われるBETAである。この種の最大の特徴が「レーザー照射器官」である。

光線級から放たれるレーザーは、大気や気象条件で威力の減衰が期待できない程の高出力を持ち、一度捕捉されたが最後、逃げる事は決して叶わないと言われている。

そして、同じBETAには誤射が無いときた。レーザー照射後には、再照射までエネルギーの充填時間があり、再照射に要する時間は光線級は12秒間。有効射程距離は

30km。

これほど脅威な光線級が、この世界に一粒のイレギュラーが誕生するのは誰も予想は出来なかったであろう。



天気は快晴、空が青く何処までも清々しく思わせる天候。そんな日であるにも関わらず、人類とBETAは戦っていた。

パパパパパパッ

ザシヤッ

ドシヤッ

ゴガンッ

ドドドドドドドドドッ

溢れかえるBETA、進軍を迎え撃つ人類。終わりが見えぬ戦いが繰り広げられていた。夥しい数のBETAの死骸に血、ひしやげたロボットや粉々に粉碎されたロボットなどが地面一杯に広がっていた。

『くそっ!』

『増援はまだか!! このままでは…!』

『いやあああつ!!』

『助けてくれー!!』

『ぎやあああああ……』

人類がBETAと戦う為に造られたロボット『戦術機』。それに乗る人間達は、戦術機同士の通信が行き交っていた。

『ちくしょう……ここまでなのだよ。BETAには勝てないのか、俺たち『バアン』……』

また一つ通信が切れていく。対抗する戦術機と迫り来るBETAの数が違いすぎて、人類は押されていた。

そんな戦場に一体の要塞級がBETA側の後方に存在していた。

要塞級、地球上で確認されている最大規模のBETAである。外殻は堅く持久力もあり、見た目は足が10本あり目も口も確認出来ない頭に蜂のような尾を持っている。

しかし、要塞級は身体の仕組み的に機動力が無いが尾節には約50mもの触手が収納されており、この触手の先端は外見が気持ち悪いだけでは無い。

何かに触れると強酸性溶解液が分泌されるという恐ろしい特性を併せ持つ。この衝角もまたダイヤモンド以上に硬く、その巨体に似合わぬ器用さでこれを振り回して行く。また、胎内に収納機能があり、光線級ならば6匹は収納されているらしい。

その要塞級が一匹の光線級を産み出していた。

産み出された光線級は、立ち上がると他の光線級には無かった動きを見せる。

突然、周りをキョロキョロと見回し自分の身体を眺めていた。そして光線級は、歩

き初めて戦場から離れていく。この時は人類もBETAも、この光線級の存在には気づかないでいた。

★☆☆☆☆

時は1998年、争いは終わっておらずBETAは北九州を上陸する。

「BETA先頭集団、朝鮮半島南端より対馬海峡に入水！なお、後続多数！」

環境など気にせず進軍するBETA達を、海から攻める敵を撃退を試みる軍隊。だが、戦車や戦艦などでは太刀打ちが出来ないでいた。戦艦に乗る搭乗員達は、連絡を回し敵の動きを把握する。しかし、把握するだけではBETAは止まらない。

日本は少しずつBETAに侵略されていく。

7月31日。

京都嵐山仮説補給基地。

「舞鶴西方6km地点にて第22機動偵察隊が、BETA第3集団B軍と接触…交戦を開始！」

「福知山付近でも交戦を確認。交戦地点なおも増加中！」

京都最終防衛戦、時間が経つ度に進んでくるBETA。人間は無条件に選択肢を選ぶ事に、戦うか：諦めて死を待つか。

選んだ選択肢…。

ビービービービー

鳴り響く警報音。 京都嵐山仮説補給基地では大人が少女達に命令を送る。

「貴様らの任務は、この補給基地の死守にある！ 実戦経験の無い…ましてや教練も満足に終えていない貴様たち学生が前に出ても正規部隊の足手纏いになるだけだ!!」

整列された少女達に、怒鳴り上げるように叫ぶ上官と思われる女性。 戦闘が近いと感じているのか、緊迫とした空気が流れていた。

「今はここを守る事だけを考えろ!!」

「…はいっ!!」

様々な思いを込めて、少女達は戦術機に搭乗してブースターを唸らせて戦場に向か

う。

『第2小隊は突撃級の殲滅』

『第2小隊、了解!』

『第3小隊は要撃級を各個撃破しつつ、光線級の殲滅を最優先とする』

『第3小隊、了解!』

通信が飛び交う戦術機の中で、少女達は前方から向かってくるBETAを見て気を引き締める。

『迎撃シフト、アローヘッドワン! 全機、兵器使用自由!! 行くぞ!!』

そして戦闘が開始される。何体か戦術機がBETAを倒すが、一体…また一体と戦術機は撃墜されていく。そして、戦術機のメインである突撃銃も弾が徐々に消費されてパイロットの気力も削られ行った。

事態は最悪の方向に進む。嵐山補給基地はBETAの侵略により陥没。それによる残った小隊は後退をする事に。

彼女達が後退する中、一匹の光線級は市街地を歩いていた。それは何かを探しているように…。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆  
★

最早、京都はBETAによって侵略されていた。そんな中、三体の戦術機は色んなものを置いて逃げていた。共に学んだ者達、それを教える教官などを。逃げている最中に三機の中で、黄色の戦術機が墜落する。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆  
★

「……つつ」

黄色の戦術機に搭乗していた少女は、墜落した衝撃で気を失っていたが痛みより気を取り戻す。

「……」

優しそうな目にショートヘアで殆ど男性なら美少女と言っても良いほどの顔付き。そんな可愛らしい少女の名前は篁 唯依。彼女は人類の敵であるBETAを殲滅する為に軍入り戦術機の訓練などを行っていた。

しかし、BETAを倒す為の戦術機は大破してしまっている。その為に機体から脱出する。

バンツ

スタツ

コックピットから出た唯依は、ボロボロになった戦術機を見上げる。

「瑞鶴……よくもつてくれたけど、ここまでか」

最後の武器である拳銃を持って唯依は、戦術機から離れていく。その近くには、唯依には聞こえていなかった物音がなっていた。

唯依は戦術機から離れてから、夜の暗闇の中で残りの仲間を探す為に戦術機が落ちたと思われる場所に足を進める。

「山城さん、和泉。聞こえていたら応答して」

パイロットスーツに搭載された無線機を繋げて、他の2人に連絡を取ろうとするが繋がらないでいた。少し歩いているとライトで照らしていた先に、光が反射した物を唯依は見つけて拾い上げる。

「これは和泉の……」

拾った物は、唯依の仲間である少女と男子が写された写真が入ったペンダントだった。そして、近くには横たわる仲間の戦術機を発見する。

唯依は戦術機のコックピットを確認するが、誰もいなかった。

「何処に言ったんだろ……」

ドシャツ

再び探し始める唯依。建物の大きく開かれた場所に出ようとする瞬間、目の前に戦術機の装甲の一部が飛んでくる。

「!!!」

装甲が飛んできた方に目を向けると、座り込む戦術機の中には仲間の姿があった。

最悪の事に、コックピットが丸見えの状態で群がるBETA。

群がっているBETAは、『戦車級』。

身体は赤く染まっており大きさは軍用トラック程。頭には複眼の様な物があり6本の足と腕が2本。そして、強靱の顎が胴体にあつた。

戦車級が戦術機に群がって、中にいる人間を食う為に狙い定めていた。

戦術機の中にいる仲間は髪はロングで少しツリ目な少女山城 上総、コックピットの中で座っていた。頭と右腕から出血しているのが見えており、少女は逃げられないのが分かっているのか冷静だった。

「山城さん!!!」

『…お願い…』

通信機から山城の声が聞こえてくる。

『私を…撃つて……。コイツらに…食われる前に…!』

唯依は震えながら両手に持った拳銃を上げていく。山城は最後の力を絞って、唯依に大声で叫ぶ。

「…撃つてよー!!! 唯依イイー!!!」

「……………!!!」

唯依は…彼女、山城の叫びと共に彼女自身も泣き叫ぶ。

ダンッダンッダンッ

「うああああー！！ 山城さんから離れるー！！！！ BETAー！！！！」

カチン

撃ち出された弾は、山城の頼みとは違い戦車級に当たるが全く効かず…拳銃の弾を撃ち切る。

それが分かっていったのか、山城は少し笑いながら涙を流した。

『…あなたにだけは、カッコ悪いところ…見られたくなかつ…』

山城が話してる最中、一匹の戦車級が彼女を掴もうと腕を上げた。 それを見た唯依

はもう一度叫ぶ。

「やめてー！！！！」

ズサーーーツ

すると唯依の目の前には、突然現れた物に驚く。そこには先程唯依が拾ったペンダントに写っていたツインテールの少女能登 和泉の姿があった。そして、眠っていると

思われる能登は唯依の方に投げ出されていた。

「えっ!! きゃっ!!」

何とか抱きしめてキャッチするが、視線を上げた瞬間：唯依は怯え始める。そこには間近で見るハエトリグモの単眼の様な大きな目、人類から制空権を奪った光線級の姿があつた。

歯をカチカチと鳴らし怯えてる中、唯依の前に立つ光線級は振り返り山城の方を見ていた。

『……』

山城もいきなり事態に言葉も出なかつた。戦車級も突然の光線級の登場に、山城を掴もうとする手が止まっていた。

次の瞬間、唯依と山城は目を疑う光景を目の当たりにする。

光線級は、少し膝を曲げて踵を上げた瞬間に素早く踵を地面を叩く。すると光線級は走り出しては、山城が乗る戦術機にかけ上がっていく。

コックピットまでの高さまで上がると、光線級は山城を掴もうとしていた戦車級を蹴り飛ばした。

メキャツ

戦車級の身体は、光線級の凄まじい蹴りで陥没して吹き飛んだ。光線級は、止まらずに他の戦車級も蹴り飛ばしていく。蹴られた戦車級は絶命してしまったのか、全く動かなくなっていた。

それを啞然と眺めていた2人は、動けないでいた。それもその筈、光線級はBET A。人類の敵、種類は違っても光線級と戦車級は仲間。それが目の前で暴れる光線級は…まるで人を助けようとしか見えないのだから。

(な…なんで)

そんな事を考えていると、光線級は一通り戦車級を蹴り飛ばすとコックピットの方に近づく。

山城は覗き込む光線級に怯える。当たり前の話だが、彼女は戦術機越して遠距離でしか見た事が無いのに光線級が間近にいるのだ。恐怖で身体を震わせて、目の前のBETAが何をするのか予想がつかない為により一層と恐怖に駆られる。

そんな事もお構いなく、光線級は背中を山城に向けてコックピットに近づく。

「い…いや…何する気…?」

光線級は背中中の臀部のような所を、少し入れると毛のような物が触手となっていて山城を自分の所に何本か操り光線級の背中に椅子でも座らせるようにした。

負傷と恐怖により動けないでいた山城は、人形のように思うがままにされていた。

そして山城を自分の身体に触手で優しく固定すると戦術機から降りてくる。

唯依はそんな光景を眺めていると、光線級は戦術機から降りてきて唯依の方に近づいていく。唯依は意識の無い能登を抱きしめながら、光線級の動きに警戒した。

光線級は、唯依の目の前に立つと突然後ろを向き中腰になり背中の山城を触手を使い、唯依に近くに降ろした。

「……」

降ろされた山城と唯依は、言葉に出来ずにいた。2人は少しずつ、冷静さを取り戻していくと目の前にいる光線級は他の光線級と少し違うのが確認とれた。

彼女達が見ている光線級は、足が人間に近いが身体に合わない細く指が2本しかないのだ。しかし、この光線級は競技者や格闘技者の様な筋肉美がある脚だった。人間のように指は5本あった。だが、残念なのが光線級の肌は緑色の為に気味の悪さが際立っていた。

そんな光線級は、山城を降ろすと立ち上がり他の残った戦車級に襲いかかる。自分より大きな相手を、軽々と蹴り戦車級を葬っていく。

誰が想像できるだろう：彼女達を助けた光線級が、アスリートのように軽やかに動き回り有段者のような蹴りを放つなど。ましてや、光線級の最大の武器であるレーザーを上手く使いこなし薙ぎ払うように照射しているのだ。

今は彼女達の味方に見えるが、こんな光線級が敵に回られたら厄介な相手では無く：人類は最早白旗を上げしかないだろう。

光線級の習性であるレーザーを撃つ際に硬直が、あの光線級には無く動き回りながら放つのだから。

何秒何十秒何分が経ったのか、2人には分からないが：やがて彼女達の前には光線級以外の生きてるBETAは存在しなかった。

光線級は座り込む3人少女の周りで、他のBETAが彼女達を襲いかかる中で守り続けたのだ。 やつと自分達の襲いかかる脅威が無くなり、少し余裕が持てた唯依は自分達を助けた光線級に話しかける。 コミュニケーションが取れるかは分かんないでいたが…。

「アナタは…：一体」

声をかけられた光線級は、唯依の方に身体を向ける。 そしてお互い目を合わせて数秒が過ぎると光線級は、不思議な行動をとる。

少し唯依達から離れて、その場でクルリと片足を軸にしてターンを決めて唯依達の方

に正面にすると足を自分の身体の幅より広げて胸？首？と思われる管のような部位を胸を張るように主張する。

シャキーン

何処と無く：そんな効果音がなりそうなポーズを光線級はとった。少し身体を後ろに反らし、どうよ？と言わんばかりの仁王立ち。

これには再び彼女達の思考を止めさせた。

そんな時、光線級は仁王立ちのポーズから目を上に向けた瞬間横に飛び跳ねた。

ドオツ

先程光線級が立っていた場所に一つの銃弾が撃ち込まれた。その爆風に唯依と山城は身体を丸めて、吹き飛ばされないようにしていた。

コオオオオオオオツ

彼女達の頭上から、建物の中に入ってくる青い戦術機が舞い降りた。

青い戦術機は光線級に顔を向けると、所持していた突撃銃で光線級に向けて発砲する。

タタタタタタツ

しかし、光線級には当たらなかつた。軽やかに躲し、その場から逃げる様に爽快な走りを見せて光線級は居なくなつた。

そして、2人の少女は緊張の糸が切れたのか意識を手放してしまった。

それから1カ月間の攻防の果てに、京の都はBETAに蹂躪され陥落したのであった。

その日を境に軍の中で、一つの噂が上がっていた。

『光線級にも関わらずに人間を助ける個体がいる』

『他の光線級とは違う性能を持った光線級』

『筋肉美の美脚を持った光線級』

『助けた人間の前で不思議なポーズをとる光線級』

など、色々な噂が挙げられていた。

☆☆☆☆

京都が陥落してから3年が過ぎ、私は戦術機の開発に力を入れていた。少しでも多くのBETAを倒せる強く性能が良い戦術機を開発する為に…。そうすれば、あの子達も死ぬ事は無かったのに。

あの日に生き残ったのが、私と和泉と山城さんだけだった。今でも思う…あの光線級はなんだったのか。何故敵である私達を他のBETAから守ったのか、未だに解らないでいた。

だけど、怨敵であるBETAであるが貴方だけには一度お礼が言いたいものだった。基地の建物の屋上で、長くなった髪が風に煽られながら目の前に広がる土地を眺めながら私はもう一度会いたいと思った。

★  
☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

3人の少女を助けた光線級は、また違う場所での戦場で敵である人間を他のBETAから守っていた。

シャキーン

あの時2人に見せた仁王立ちのポーズを助けた人間に見せながら。

## 形とは時間をかけて作り上げるもの

とある基地でのブリーフィングルーム、部屋は暗く壁に吊るしたシートに映像が投影されていた。そこに映し出されていたのは：筋肉美の足を持った光線級だった。

シートに映している光を邪魔にならないよう横に立つ男性が資料と思われる紙を読み上げる。しかし男性は浮かぬ表情だった。

「…あー、今日集まってくれた事だが。本日からこの光線級の名前は『ルクス』だ。

光線級の俗称で元々が『ルクス』だが、他の光線級と別扱いする為だ。」

集められた男女の戦術機を搭乗する衛士達は、冗談と言わんばかりの顔を浮かべていた。

それもその筈、人類の敵であるBETAの一匹である光線級を何故別扱いするのか。

確かに他の光線級とは違う足を持っているのかは理解は出来ないでいたが。

「……君達が言いたい事は、顔に全部書いてあるな。私も書類を読まなければ、現実味の無い話だと思ったよ。しかし、これは現実だ」

「質問宜しいですか？」

1人の男性衛士が挙手する。

「許可する」

「そもそも何故、今更光線級の名前に関して変更があるのですか。不可解です、確かにその光線級は他の奴とは違った足を持っています……理解が出来ません」

男性衛士の言葉に、他の衛士達はウンウンと頷いていた。それもその筈、ただ足が違うだけで衛士を集められたのか解らないでいた。

だが、この『ルクス』の目撃情報など行動を知れば此処にいる衛士達は驚愕するに決まっている。

「この『ルクス』は、他の光線級と違い集団行動を取らない。此処からが本当の実話で……今後の対応だ」

男性の只ならぬ雰囲気は部屋中に広がり、衛士達は喉を鳴らす。その中で衛士達は、頭に引つかかる言葉があつた。

男性が言っていたが、光線級は他のBETAとは違い遠距離に特化したBETAであ

る。その為に集団で行動して、後方で制空権を奪うのが光線級なのだから。

そして、シートに映し出された『ルクス』の一場面一場面が流れていく。

それを見た衛士達は、開いた口が塞がらない表情だった。

「君達の気持ちは理解できるつもりだ……しかし、現実だ。『ルクス』は我々人間には敵対心を持っていないようだ。可笑しな話だよ、BETAの名前を覆しているのだから。」

そして、此処からが本題だ。『ルクス』を発見次第、上からの命令で捕獲しろとの事だ。決して殺さずに捕獲しろ、それが君達への命令だ。疑問があるのが飲み込め！

以上終了だ！」

こうして、奇妙な光線級は『ルクス』と言われるようになったのだった。そして……本来人間を追いかけるBETAの筈が、逆に追いかけるとは『ルクス』には予想は出来ないでいただろう。

目を覚ませば……目の前は地獄のような光景。

どうも、今までの記憶も名前も無くしてしまった者？です。突然の広がる光景に頭が処理し切れずに冷静な私だった。

余りの事があると驚くより冷静になれると言ったもんですが……本当だった。

そんなこんなで私は、状況確認する為に周りを眺めるが……化物化物化物化物化物ばかり。右も左も前も下は自分の足で上は大きな化物。見渡しても理解出来ず、頭に鳴

り響く何かを無視をして私は……この場を後にした。

取り敢えず、あの地獄のような場所から離れた私は誰もアイツらもない高原に辿り着いた。

この時、私は今の身体を色々調べ終わった。

後ろを振り向いて自分の身体見ると…男性のお稲荷さんにしか見えなかった。足は細く指2本、途中で川の水の反射で顔を見たが顔…なのか？ デカイ目しかなかったのだ。全くもって化物ですわ。

そして、この身体で凄い事が出来る事に。

事の始まりは化物の群れと離れて、何処かに向かおうとしている最中…遠くを見ようとしたんだ。すると、目の前が明るくなって…目からビームが出たんだ！

この発見に私は心が踊った。この身体になる前は少年だったのか、今の身体の不満は吹っ飛ばされた。ドリル、ロケットランチャー、刀など扱い辛いけど威力が異常の武器などは浪漫だと思う。その中に…ビームは入るだろう！ SFな世界で主流、太ければゲロビと言われるビーム。

今は心をウキウキしていたが…数分後に私の心は深海より深く沈んでしまった。

最初は色々知る為にバカスカとビームを空に撃っていた。撃った後は、12秒ぐらいのクールタイムがあった。

それは…まだ許せた。だが、6発ってなんぞ!? リボルバーじゃあ無いんだぞ！

5発ぐらいから身体に力が入れ辛くなり、6発目でボタンキュー。数時間その場に倒れ込んでいたが、少しずつと動けるようになった。

これには私は幻滅。　撃ち過ぎれば死ぬ要素なんて浪漫で無い無謀だ、産廃と言つても良いだろう。

他には、最初に目覚めた時にもあつたがああの化物達が近くにいと頭に何かが鳴り響くのだ。

試しに他の場所に移動してゐる時にあつたのだが、約1kmぐらいから感知するらしい。そして近ければ近いほど頭の何かが強く鳴り響く。最初は何が鳴り響いてゐるのか解らず、意識して解読して見る。すると言葉で言えばこう言つていた。

『回収せよ』

この一言が頭に鳴り響いてゐる事に理解する。

だが、何を回収するのだろうか。私にはその言葉の意味が理解出来ないでいた。あの化物達は何かを求めているのか：私も同じ身体持った者だがよくわからん。

あ、毛みたいな物は触手なのか意識して動かそうとすれば思う通りに動く事に発覚。

この身体に1番驚いた事があつた。口があつたのだ。口は本来顔に存在する物で、一度自分の顔を見た時に目しか無かつたので無い物と見ていたが：背中にあつたのだ！　男性のお稲荷さんのような身体の背中にだ。

因みに空腹感とは無いのだが、何かが足りないと思う時がある。まさにビームを撃つた後とかに。

口があれば何か食してみようと試みた。試しに山にあった野イチゴや木の実を食べて見たが味が無い。味覚が無いのか食べる楽しみが無かった。

でも少し満たしたと感じた。

そして何年か過ぎた。

色々な所にも行つた。この身体は呼吸しないのか、海の中に入っても苦では無かつた。　　だけど、潮で流されたのは大変だつた……。

太平洋横断は長かつた。その時に化物達の集団にも鉢合させた。しかし、あつちは私に興味が無いのかスルー全開。私も同じくスルー。

海の中では時間の流れは分からないでいたが、長い間海底を歩いていた。最初はバタ足で泳いでいたが、途中鮫に出くわして襲われた為に断念。鼻を蹴ったら逃げて行つたが。

久々に陸に上がり、再び自分の身体に対してどんなポテンシャルを持っているのかを調べていこうと考えた。

陸に上がった時に私の目の前に人間がいた。これが初めての人間との対面だつた。だが、私を見た人間の顔は恐怖に塗り潰されたような表情だつた。

まあ、確かに私のような外見がいきなり現れたら誰でも驚くであろう。そして人間

は何かを叫んで私から逃げる。

「%<e---%<%\$☆x::タ>|,・○↓♪-!!!」

この身体には聴覚があるのだが、人間の言葉が理解出来なかった。日本語、英語、中国語など：色々な言語はあるがあの人間が叫んだ言葉は私には聞き取れなかった。

これには参った。人間とのコミュニケーションが取れば、幾分か協力してもらおうと考えていたのに。

私は逃げていく人間とは違う方向に足を進めた。この時にその場に居続いていたら殺されていたとは知らずに。



広島海辺。

その日は快晴。 1人の男性は海辺で散歩していた。

「うーん、今日は良い天気だ。何か良い事がありそうだ」

身体を伸ばして気分良くしている男性だったが、この後恐怖のどん底に突き落とされる。

ザバァ

何か海辺の方から音が聞こえ、首を聞こえた方に向けるとBETTAがいるのだ。

男は一気に気持ちが入れ替わる。目の前にいる存在が、自分を殺す存在だと瞬時に理解していた。そして男は尽かさず逃走を図る。

「BETTAだー！ BETTAが現れたー!!!」

そう叫びながら男は広島に建てられた基地に逃げ込んでいった。そしてBETTAの発見により、駆除の為に軍が戦術機を送り出したが…その時には海辺にはBETTAの姿は無かったのだ。



私を見て逃げた人間とは逆に歩いていた私は、森を見つけ中に入っていた。

とりあえず、この身体は鍛えられるかと痛みと治癒能力があるのかを確認しよう。私は鍛えられるとするならば足であろう。

この移動にも使う足を鍛えられれば、もし人間と化物から襲われても対処出来るしな。そうと決まれば最初に痛覚に対してだ。

近場の木を選び、丁度良い枝を見つけては折り自分の身体に突き刺してみた。だが、刺さってはいるのだが：痛みが無い。麻酔をかけられた部位に何かを押し付けられている感覚なのだ。となれば、この細い足で木に蹴りつけても痛くは無い筈。

そう決めつけた私は、自分の足で蹴り倒せるか倒せないかの試し甲斐がある木に勢いつけて蹴った。

メキヤツ

見事、折れる音がする。



3日後、足は完全に治り歩けるようになった。そして嬉しい事が判明した。人間の骨折のように一度折れた骨が太くなるように、私の足も少し太くなっていた。改めてみると右と左の足の太さが違うのだ。これは左右合わせる為に…もう1度？

ぐわあああああああつ

メキヤツ

あれから数日、私は今日も折れる音を聞いていた。

バサバサバサバサツ

木が倒れる音を。

あれから私は、幾度となく木を蹴り続けていた。

折れては治

し、折れては治しの繰り返し。最初の方で何となく、これを繰り返せば足が丈夫になるのでは無いかと。

実際試す為には気が狂いそうなほど足を折った。しかし、努力の甲斐があつて少しずつと折れ辛くなり最終的には逆に木を折ることに成功。

よっしやあああああつ

心の中で私は歓喜していた。何回もやめようと考えていたが負けずに頑張つてくれた。結果が出た事に嬉しくなり、私は突き進んだ。

この身体で走るのは向いていなかった。それは指が2本しか無いからだ。動物は指が5本なのだ、前の私は人間だったのだろう。感覚的に走り辛いのが教えてくれる。しかし、欲しがつても指は増えぬ為に2本指の足での走りに慣れようと考えた。

何十kmも走り続けて何度も転んでいたが、陸を跨ぎ再び海を見る時には爽快に走れるようになっていた。それに気がつけば指は5本指。これは最高の成果だった。

この身体は少しずつと対応していると実感した。

ならば行ける所まで行こうと考えた私は、再び海に入つて行く。

パ  
パ  
パ  
パ  
パ  
パ  
パ  
パ  
パ  
パ

ゴ  
シ  
ヤ  
ツ

メ  
キ  
メ  
キ  
ツ

ザ  
シ  
ユ  
ツ

私は今：戦場にいた。

海を渡り新たな陸に辿り着くと、そこには化物達と戦うロボット達の姿があった。

どう見ても物量が化物達の方が優っている。ロボットの方は雀の涙。

私は遠目から覗いていた。不用意に戦場に立てば命を落とすのを知っていたから。

うわっ、あの赤いのロボットのの中から人間を引っ張りだして食ってるな…。

その後はロボット側が全滅。化物達は他の場所に目指しているのか居なくなった。

その場にあるのは、ロボットの残骸と化物の死骸。私は戦場の後を歩いていた。

その時に私は思った。

共喰いは出来るのか？

思ったら即実行。半分になっている赤いのを喰らおうとしたがサイズが…。小

さくする為にビームを使ってみたが全部消してしまった。失敗失敗、2度3度と繰り返

返して思いついた。

片目だけで撃てないのか？

試してみたが：撃てた。両目より威力と細いが調節するには最適だった。そしてビームで切り分けた赤いのを触手で掴み口に放り込んだ。

うん、無味。しかし、木の実とかよりは得た感がある。そして、先程発見した片目撃ちを試そうと。残弾が切れて動けなくても餌はここに沢山とあるのだ。試す価値はあるだろう。

ビームを使って試した事で発見した事が幾つか。

片目撃ちで6発が撃てることに。両方合わせて12発、片目を撃ち尽くしてもボタンキューが無いのはデカイ。後、単純に両目と片目の威力が違う為に多く撃てるだけの話だった。両目撃ちだと多くエネルギーを使うのか、6発打ち切るとボタンキューするという事だった。

そして片目撃ちの良い所は：クールタイムが無い事。これは戦い方に手数と幅が増える。

粗方ビームの実験が済むと、私は次の実験に移行した。

私の蹴りで化物達に通じるのか。同じ身体を持つ化物は：弾けた。赤いのは凹むほど。少し大きなサソリを似せたような化物は手こずった。ゾウムシに頭に殻を付けたような化物は、殻に対しては歯が立たないがアイツはケツが柔らかいから関係無かった。

色々と試せて楽しくなつて行く私は、突然と記憶が戻ってきた。決して全部では無かったが戦う知識や戦闘経験が頭に浮かんだ。

これは：前の私の記憶？

不思議とその記憶は私のだと確信した。これにより自分の身体を自由自在に動ける様になった。無駄を無くしてより一層の身体能力を向上させる事に成功。それを歓喜する私だったが、突如頭に鳴り響く。それは近くに化物達がいる事を示していた。

それに不安感が襲う。

気づけば私がいる所は中国だった。そして化物達は私が前にいた大陸の方に向かって進軍していた。今思い返せば、あそこは日本だったので無いのか。

戦う力を付けた私は、これ以上人が死ぬのを見るのは良い気分では無かった。そう感じた私は、ここまで来た道を戻る事に。

人間と変わらない脚を使い、最大限に鍛えられた筋力が私の身体を前に進む。人間

には不可能な速度を私は大地を蹴り続けて出していく。

待っている、日本！

地球の半分以上である海に私は再び入っていった。

☆☆☆☆

私は化物達が向かう先を予測して、再び日本に上陸していた。しかし、少し場所がズレてしまったのか市街地に着いてしまった。そんな所に離れた場所に4機のロボットがいた。

だが、3機のロボットは離れてしまい残る1機が集まって来た化物達と戦い始めた。

持っている武器が使えなくなったのかロボットは、片足をやられていた。動けないロボットを追い討ちをかけるように、ゾウムシのような化物達がロボットに突撃して行く。

しかし突撃していく化物達は私が既に後ろに回り込み片目ビームでケツを焼いて殺した。

鳴り響く頭は強く無い為に、近くには化物達がいないと分かると私は仰向けに横たわるロボットに近づき胸部分を蹴り上げる。

開かれたコックピットを覗き込むと、1人の男性を発見する。男性は私の顔を見ると驚いていた。私は男性を触手で掴みあげると、男性は腕き暴れ始める。それでも強くせず外に出した。

外に出された男性は少しずつ大人しくなっていく。不思議に思った私は、彼の身体を見回すと背中に出血した場所を見つける。それを見た私は：彼は助からないと分かってしまった。とりあえず、顔を合わせるようにすると彼は何かを喋っていた。

相変わらず何も理解出来なかったが、唇の動きを見て解読。

『くそ、お前らの所為で何人の生徒が死んでいったんだ。最後に残ったのが3人か：

どうか逃げ切って……く……れ………』

そうして…彼は動かない物になってしまったのだ。

少し離れた場所に、戦闘音が聞こえて頭に鳴り響くのが強くなっていた。私は彼を優しく置いて、先ほどの3機がいると思われる場所に向かった。

私は建物に墜落したロボットを見つけた。コックピットは空いていて中には誰もいなかった。もしかしたら、近くにいるかも知れないと探し始める。

「X%\$—!!!」

うん！ これは人の叫び声！ あっちか!!

私は尽かさず声をした方に走り出す。建物の中を走り抜けていくと頭が鳴り始め、そこには白いキノコのような化物3匹が、ツインテールの少女に襲いかかっていた。

片足を掴まれ宙ぶらりんになっており、私は少女を掴む化物に走って近づきジャンプしてから横回転を加える。化物の首を切るように蹴った。

ズバツ

首と胴体がお別れした化物の首は、私の着地地点に落ちて来たのを2匹目の化物の頭に向けて蹴り上げた。

化物の顔を化物の顔にシューー！

「顔がぶつかり合った化物は顔が吹き飛ぶ。のこり1匹は、天井ギリギリまで回転しながら飛んで遠心力がついた踵落としを化物の頭に打ち込んだ。

潰れたトマトのように弾けた。

頭が無くなった化物は、掴んでいた少女を下ろし身体を横たわって行く。とりあえず少女を助けられた事に、ほっと落ち着いた。

だが、助けられた少女にとって私は3匹の化物達と変わりはない。

「>+・↓\$÷=I?—く:○\*:\*X!!」

化物の手から離れ、私の姿を見て怯えながら身体を引きずり後ろに距離を取ろうとする。しかし少女をこのままにしておくには、此処は危険なのだ。

その為に彼女を安全な場所に避難させなければならない。

「##.#.#.\*○.\$€—!!」

私は少女には悪いが近寄っていく。少女は私から逃げ続けるが、壁に追い込まれていた。逃げられなくなった少女に対して、私は目の前に立つと片膝をついて身を低くする。

後々考えて見たらSFホラー物だな。

近寄る私を少女は壁にへばり付きながら首を振る。彼女に触手を伸ばしていくと、

彼女は恐怖によって精神的に限界を迎えたのか失神してしまった。

…あらう、まあいつか。これで楽になった。

私はあるだけの触手を器用に使い、少女の四肢や胴体と頭に巻きつける。少し持ち上げては、彼女の体制を椅子にでも座らせるような姿勢に整える。

そして…私の背中に乗せる！

私の身体の形状的にトに近いので、椅子に座らせるようにするとフィットするのだ。これで彼女を運べるのだ。注意点は首を歩く時に合わせたサポートしないと痛めてしまう為に、触手で補う。そして彼女を落とさない為にしっかりと触手で固定。

これでバツチリ！ よし、彼女を安全な場所に運ぶか。化物達の死体を放つたらかきにして、私はこの場を後にした。

少しの間、歩いていたが少々迷ってしまった。困りながらウロウロとしていた所、少し離れた場所で大きな音が聞こえた。

他の生存者か！

私は背中にいる彼女に負担をかけないように、揺れを抑える為に爪先走りで音の発生

源に全力で向かった。するとまた頭に鳴り響く。

パンツパンツパンツ

目的先から発砲音が聞こえてくる。もしかしたら、化物達と応戦しているのか。

そう考えた私は、一段階ギアをあげて走っていく。

「・〇＋ー！！」

建物の中で大きく開かれた場所に辿り着くと、そこにはロボットに群がる赤い化物達とショートカットの少女一人を発見。私は走っていた足を緩めなかった。そして、化物達と少女の間に入るように滑り込む。

ズサーーッ

そして私は赤い化物がロボットのコックピットに頭から血を流す少女も発見する。今にも赤いのに襲われそうなのに、背中 of 彼女をパージ！ ショートカットの少女にパスをして、念の為安否を確認する為に後ろを振り向く。

すると、私の姿を見てツインテールの少女と同じように怯えていた。歯をカチカチとならながら。

最早怯えられるのは慣れたな。それよりも長髪の子を助けんな！

私は足を最大限の使い方をする。足の始動は膝、そして加速させるのが踵だ。その為少し膝の力を抜き踵を上げる。

その動作をした瞬間に、身体を前に倒して踵で地を…蹴る！ この身体になってから鍛え続けた足には、この動作は余裕だった。

柔らかい筋肉で柔軟、これが私が求めた足だった。 0から1000の害虫である蜚ヒよりは劣るが、今の状況には十分な事だった。

素早くロボットに近づいては駆け上がり、長髪の子を掴もうとする赤いのを蹴った。  
メキヤツ

すると赤いのは蹴った場所が陥没して威力が強すぎたのか、身体が吹き飛ばされていく。

…マジか。

蹴った私ですら動揺したが、長い時間足に負担をかけて鍛えあげられた強靱の足にとつて当たり前な事だった。 瞬時に正気に戻り、他の赤いのを蹴っていく。 ロボットに引っ付いていた赤いのが居ないのを確認したら、私はコックピットの中を覗き込む。

そこには怯えている長髪の子。

『い…いや……何する気…？』

読唇術を使って唇の動きで彼女の言いたい事を読みとる。

…うんうん、最早怯えられるのは仕方がない。 さっさと助けますか。

私は背中をコックピットに向けて、触手で彼女を掴み取り出した。ツインテールの子とは違い、大人しくしていた為同じく私の背中に乗せた。私は長髪の子を乗せてロボットから降りていく。

私がロボットから降りて、ショートカットの子に近寄ると意識の無いツインテールの子を守るように抱きしめる。私はもう心の中で溜息を吐く。確かに私の身体は、化物達と同じなのは認める。偽善の心で人を助けているのも認めるが……ここまで助けた相手からの行動が否定的だと心が折れそうになる。

心が廃れそうになりながら、ショートカットの子に背を向けて片膝をついて長髪の子を近くに下ろした。そして、私は残っている赤いのを見て……心の中で叫んだ！

テメエら!! 八つ当たりにつき合ってもらうぞ!!!

私は力の限りに赤いのに暴力を振るった。

1発1発に怨念を込めて赤いのを蹴っていく。少し離れた赤いのは片目撃ちで葬っていく。そんな中、私を無視して少女達に襲いかかる赤いのがいた。

どこ見てんじやー! 赤いのー!!

勢いをつけてマスクライダー張りに飛び蹴りを放つ。余りにも多い数の赤いのを見て、私は必殺技の1つを使うことに。

くらえっ! 薙ぎ払い!!!

両目撃ちは威力も高く照射時間が長い為に使える技の1つ。 …どっかの作品の巨神兵みたいだな私。

何もともあれ、頭の鳴るのも無くなり近くには化物がない事を確認した。

「Xも・\$…♪☆↓…」

んっ？ 突然話しかけられたような。

私は彼女達がいる方に振り向くと、ショートカットの子が何か言いたげな様子だった。しかし、私が近寄るのは良く無いだろう。そんな事を考えていて、ふと思いついた事があった。

即実行に移った。私は彼女達から少し距離をとってから、その場で片足で回る。

彼女達の方にまで身体が回ったら足を広げて胸を張った。

シャキーン

決まった…。こんな行動は他の化物には、絶対しない行動だろう。このポーズするのが私だと、少しずつ人間達に覚えていつて貰おう。そうすれば人間達は私が他の化物とは違うと認識してくれるはず。

そんな事を考えていたら…突然触手が逆立った。ゾワリと身体が震えそうになり、上の方に目を向けると何かカツコよさげなロボットが私に銃を向けていた。

やべっ！

私は尽かさずその場から離れた。

ドオツ

私を狙った弾は床に当たり、爆風が巻き起こった。私は体制を立て直し、降りてくるロボットを視野に入れる。

コオオオオオオツ

青いロボットは、私に顔を向けると容赦なく撃ってきた。

タタタタタタツ

ちよっ!? やめ! 当たるー!!!

何とか避けきり、このまま此処にいたら殺されかねないと思って逃走を図った。本当に死ぬかと思った。建物を走り外に出た。今は夜の為に、静かで夜空が綺麗だった。

色々と疲れた私には、少し癒された光景だった。そして…私は歩き始めた。

日本だけでは無く、色んな大陸を回って少なからずと助けられる人間は救い…あの

に。ポーズを見せ続けた。

いつの日か人間達に私と言う存在がいると分かってもらう為

## 合わせる身体

この日は、私にとって大切な日だ……。敵対するBETAに対する兵器である戦術機、私はより強く早く性能が良い戦術機を開発する為に『XFJ計画』に参加した。

だが、どんなに良い戦術機を作ったとしてもBETAを葬る為の武器も無ければ……奴らの獲物に過ぎない。ならば、突撃級の装甲すら貫く武器を作り上げればいい。

それが『試製99型電磁投射砲』だ。長い時間をかけて日本帝国軍技術廠により試作された戦術機用装備なのだ。強大な磁場を発生させるローレンツ力によって弾体を加速し発射するこの電磁投射砲は、極めて高い初速による貫通力に加え120mm砲弾を毎分800発の速度で連射が可能。

そんな装備を私はアラスカにあるユーコン基地に運ばせた。そして装備が様々な

話が上がりに使われる時が来た。

X F J 計画でテストパイロットに選ばれたアメリカ合衆国陸軍戦技研部隊所属『ユウヤ・ブリッジス』少尉に託す事に。

彼には過去に辛い思いをしたのか、日本は余り良くは思っていない。しかし、可笑しな話か日本で作られた装備を使わせるのは皮肉になってしまふのかとその時私は少し罪悪感を感じていた。

彼とは色々とぶつかる場面はあったが、今では少しずつお互いを認めるほどになっていた。

ミリコヴァ地区、BETA上陸予測地点では作戦通りに我々と他国の隊で編成された戦力を配置に着く。

そして、コード991が発生。BETAが襲来を知らせる警報、それが世界に電磁投射砲の性能を公に晒す瞬間だった：筈だった。

あの光線級が現れなければ。だが、私は不思議と嬉しかった。また光線級を見れたのだから。今の世界での常識を覆した一体のBETAが、また1人また1人と命を掬い上げていた。

それが、世界と不思議な光線級との関係を決定づける瞬間でもあった。



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ

ミリコヴァに凄まじい数のBETAが、海から陸に上陸していく。その際に待ち構えていた人類は、BETAに向けて攻撃を開始する。

戦術機をメインに、ヘリ・戦艦・戦車を使い戦闘が行われていた。少し…少しずつと戦車や戦艦から放たれた砲弾はBETAを倒していく。

しかし、現実では理不尽な事が多くある事が普通である。作戦通りに行かず、戦車の数は足りないのかBETAの進軍を許してしまっていた。その為、控えていた戦術機達がBETAとの戦闘が始まった。

人類とBETAでの戦闘では、余りにもBETAの物量が大きく人類の被害は大きくなってしまふ。人間は感情を持ってゐる為に、死に恐怖してしまふが為動きを止めまいBETAの餌食になってしまう。逆にBETAは恐怖など知らずに、お構いなく襲いかかるのだ。無情にも時間が過ぎる度に、犠牲者が無慈悲にも増えていく。一機のソ連軍の戦術機が頭部を破損し、コックピットでのモニターは外の映像は切れ機体は倒され戦車級が群がっていた。

「ガチガチガチガチッ。 た…助けて、誰か！ しつ死にたくない!! 嫌だー!!!」  
ソ連軍に所属するまだ幼い少年の衛士は、短い走馬灯を眺めながら迫り来る死に怯えていた。

動かない横たわる戦術機に群がった戦車級は、コックピットの開口部分を持ち前の力で抉けようとしていた。

ギギギギギギギツ

金属の嫌な音がコックピットの中を鳴り響く。少年の衛士は身体を震わせ、この後に起きる惨状に失禁していた。そして…。

バガアッ

凄まじい音を鳴らし、コックピットの蓋は開けられてしまった。少年の衛士は、歯をカタカタと鳴らし身体を震えコックピットの中を覗き込もうとする戦車級の姿を

待った。

ヒヨコッ

しかし、少年の前に現れたのは予想できていなかった物だった。

そこには身体は緑に染まって、大きな目を2つ持ち人類から制空権を奪ったBETAの光線級の姿が。

その後は、少年の衛士は語った。

『意味がわからない』と…。

★☆☆☆☆

ふうー。  
長い月日を重ねて、今の今まで生きてきた…どうも、名無しこと私です。

様々な場所に歩き、海を渡り陸を横断して化物達を葬ってきましたな。私に助けられた人間達は、全員とは言わないが恐れる者が9割。

せいぜい小さな子供が怯えず、好奇心で近寄ってきたのは私の心の癒しだった。

それにしても、人間達と化物達の戦いは長い。一度私は化物達が湧いている所を見つげ出し、絶滅を図ったが、巢みみたいに建てられたオブジェに近寄ろうとしたが頭が割れるかと思つた。

化物と近くにいる時に私の頭に鳴り響く何かが、巨大なスピーカーや稲妻などでは比較にならないほど私の頭を蹂躪する。

「『回収せよ』」

余りの大きさに何重にも私の頭を鳴らし、気絶してしまつたが巢に近くにいる限り頭が鳴り響く為に何回何十回と起きては気絶の繰り返し。

気が狂いそうになる中、正気を保ちその場を離れた。金輪際、化物達の巢には近寄りたいたいと思わない。私も化物であるが。

何はともあれ。

私は地球を一周したんじゃないかと言わんばかりの距離を歩いていると、奴らが近くにいる時の頭に鳴り響く物が発生した。

今は私は海底で歩いていると、陸に目指す化物達の大行進を見つけた。奴らが陸に

上がれば戦闘があるのが当たり前になっているのを私は学んだ。

なので、私は急いで奴らの後を追う。水中では何も出来ない私は、少しでも前に進む為にバタ足で急いだ。

だから！ 鮫、お前は邪魔!!

漸く陸に上がれば、案の定と化物達と人間達が戦っていた。そして私も人間の方に加勢に入る事に。

んっ？ 何故、私が人間と一緒にやないと奴らを倒さないのだった？ それは効率良く奴らを倒せていけるのと：奴らは私だけで戦って疲れ果てて横になっていたら、今まで無視しているのを嘘だったんじゃないかと言わんばかりに群がってくるのだ。

あれには肝を冷やした。人間達が味わっているに違いな恐怖に襲われたのだ。大量にいる奴らが疲れ果てた私に向かってくる光景。

あんな恐怖は御免だ。だから、私は私だけで戦わず人間達と戦かう事を決めたのだ。

今日も今日とて化物達にやられているロボットを加勢するように、奴らを葬っていく中で私は一機のロボットを見つけた。頭部が破壊されてだけで倒れ赤いのに群がっているのを。

私は閃いて、ロボットに向かって走り出す。そして、私は赤いのを蹴り飛ばしていきロボットの腹に乗った。今このロボットが動けないのは、頭部が無い為に外が見えないから動けないと見た。ならば、使う手は無い。

それにしても：戦場の少し離れた場所から変な違和感が身体を反応させる。チラツとその方向を見ると、そこには白をベースにしたロボットが見えた。何故か私はそのロボットに違和感を感じていたが、一度意識から外し目の前のロボットの胸部分を鍛え続けた脚で蹴り飛ばした。

見事コックピットの中を覗けるように破壊し、中を覗き込んだ。そこには恐怖に染まった表情で震えた少年がいるではないか。まあ、大半は私の姿を見て怯えているのはわかる。

しかし、時間に猶予は無い！前に私はこれと似たロボットで片腕が破損しただけの奴を操縦した事がある。見た所、その時の奴と中身は変わらないのにホツとして私は少年を触手で丁重に掴み上げ：コックピットから出すと私は行動に移した。

ムニユ

コックピットの中に私の身体を後ろから入るだけ押し込んだ。

後は、入り込んだ触手を使い操縦する為の機器を操る。一先ず、機体を起き上がりさせてから宙ぶらりんの少年を固定する為に私の足に持つていく。両足で輪っかを作るようにして、少年を挟み絶対に落とさず余り負担をかけないように頭にも触手を巻いた。

巧みにロボットを動かし、近くにあった銃を拾い上げる。

よしっ！ では、私（わたくし）は戦場の華と成りに行きますか！！

人間が作ったロボットは空が飛べる。ブースターを唸らせて、戦場をかけて奴らを手を持った銃で撃ち込んでいく。おっ、仕込み武器もあるじゃないですか。チェンソーのような小さな武器で近接戦闘も行う。

今私の足に挟まれた少年には悪いが、赤いのが少年に襲いかかろうと必死なる為の良い圏になるのだ。

カチン

おっと銃の弾が切れたのか。近接戦闘だけでは後退している戦車達に援護出来な

い…ならば！

私は少し機体を上昇させて、戦車を追いかける奴らにとっておきをお見舞いする。

機体の両手を私を庇うように丸めた後に胸を張らせる。

喰らえっ、ブレストフ○イヤー!

私の必殺技と言っても過言でも無いビームを長く照射して、戦車を追いかける奴らを薙ぎ払った。　：少し疲れが来たのか、身体に違和感が。

だが、今の私はロボットが機動力なのだ。　少し無理に撃てるのがデカイ。　1番奴らの中で巨大な身体を持った化物に、ロボット達が苦戦しているのを見て再び使用する。

ブレスト○ーン!!

ビームに調節を加え、威力を一点に細め切断力高めたビーム。　下から上になぞらせるように、巨大な化物相手に放つと縦一直線に切れて真っ二つにした。

ヤバイ：これ以上ビームを撃つには危険だ。　私は戦い方を変えてまだ増える化物達を倒していくと、不思議な事に気付いた。

ロボットや戦車達がある場所から離れていく。　それを見た私は周りを眺めると、先程違和感を感じたロボットの前にはロボット達や戦車達の姿が余り見られなかった。　余りとは半壊したロボットやキャタピラが破壊された戦車など。

違和感を感じるロボットに装備された武器に何かあると踏んだ私は、動けないロボットから銃を拝借して化物達を倒しながら一先ず動けない戦車達を移動させる事に。

それを見た他のロボット達が、私と同じように化物達と交戦しながら動けないロボッ

トや戦車を移動させ始めた。

全てあのロボットの前から、味方の物を退かすと私の動かしているロボットとは色違いの奴が近くにいたので近づくと、何機かのロボットが、色違いのロボットを守るように陣形を固めた。それを裂くように色違いが、逆に私の方に近づいて来た。

私は足に挟んでいた少年をロボットの手に乗せて、色違いに渡すように腕を伸ばした。

ここからは少年がいては危険の為に、今の内に渡しておくのが無難だろう。色違いは外部スピーカーを使って何かを喋っていた。だが、残念。

私には君達の言葉は理解出来ない。だから、少年を受け取ってくれるまで動けない。下手に動けば少年を落としてしまうのだから。

だが、他のロボットは私が色違いの返答が無いのを敵対しているように見えたのか武器を構える。

やめてくれよ……こっちは動けないし、少年を落とすたくないのだ。

そんな気持ちの色違いに通じたのか、後ろにいるロボット達を止めるように片腕を上げた。

ふー。

そして色違いが少年を受け取ると私は、再び戦場に戻る。私は今頭の鳴り具合を確

かめながら、化物を集めるようにする。

ある程度、化物達を集めきって白のロボットに向けて目を光らせる。

ピカピカッピカッピカッピカピカピカッ

モールス信号のように一定のタイミングで目を光らせる。 気付いてくれるか？  
もう陸に上がっている化物で全部だと。

すると白のロボットは持っている装備を一度銃身を上に向けて再び構えた。

：理解したと見よう、私は素早く機体を動かして射線上から離れると身体が震えた。

ヴォンツ

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

私の後ろでは白のロボットから放たれた攻撃が爆音を鳴らし続けていた。 もしや

：私は入らなかつたのでは？ あんな武器があれば化物達を殲滅するのも簡単だろう。

しかし、砲撃が終わった後の白のロボットから違和感が弱くなるのがわかつた。 も

しかして：あの攻撃は。

難しく考えていた私は、一度ロボットを地面に降りる。 もう私の頭には何も鳴り響

く事が無いことに化物達がいなのを確信した。 ならば、私はお役ご免だ。 ロボッ

トを拝借して遠くに行こうとすると、白のロボットより奥の方から頭に話しかけるよう

な感覚に囚われた。

んっ？ 誰かいるのか。

だが、その感覚は一度だけで私からの返答は無かった。 気の所為だと決めつけて、一体の赤いのを持ち上げて場を離れようとするが先程のロボット達が立ち塞がる。

私は気にせず、上昇させて飛び立とうとするが色違いがロボットの腕を掴み止める。

：しゃあない。

私は片目でビームを色違いの掴む手を焼いた。 驚く事に色違いは大人しくそのまま私を去るのをただ見ていたのだ。

まあ、少年や他の人間を助けた代金として一機のロボットはもらう事に。 飛べる所までどっかに行きましょう。

身体に風を浴びても心地よく無かったが、気持ち的にはまた命が救えてよかったと心地よく思えた。

さて：何処に行きますか。



やっぱりあの『光線級』だ。貴方には色々と本当に驚かしてくれる。  
近いうちに…また出会うとは私は知らなかった。

## 繋がりと言う糸

ゴオオオオオオオオオ

さて、私は空を飛ぶ手段を手に入れ優雅に飛んでいる。

ふうー、これならある程度は楽が出来るな。　とりあえずはまだ行っていない場所に行きますかな。

ガクンッ

what!?!　ロボットのブースターを確認すると、噴射している炎が少しずつ弱くなっていた。　高度が下がる中…突然とブースターが止まってしまった。

おわあー!!　落ちてるー!!!

先程の戦闘で、このロボットの燃料が大半が消費してしまっていたらしい。　その為

に余り飛べなかったのが今の現状なのだ。片方のブースターから止まってしまい、機体は回転しながら降下していく。

このままでは私はロボットの下敷きになってしまうので対処を行う。

ポンツ

私は身体をコックピットから抜き出して、ロボットから離れる為に蹴り距離を取った。

うわゝゝ高ゝい。このまま落ちたら流石の私の鍛えた脚でも耐えられないだろう。ならば…タイミングと調節で私の命を賭けることになる。

ヒューー

私は落ちてる体勢を縦では無く、横にして空気を受ける面を大きくする。少しでも落ちる速度を下げる。徐々に荒野の地面が迫ってくる。私は覚悟を決め、残り100mを切った瞬間に再び身体を縦にした。頭を下に少し速度が上がるが、重要なのはタイミングと調節なのだ。

5…4…3…2…1…今!

私の得意な攻撃の1つ、目から放射出来るビームなのだ。いつも化物達と戦って使ってる時は威力を収束させて攻撃手段として遠距離砲と使っている。

だが、収束せず広範囲にビームを撃てば威力は分散されるが勢いが発生する。その

為、それを使用すると私の身体は後ろに持っていくのだ。最初の頃に色々とビームの打ち方を試していた時に発見したのだ。

今それを使う時！

バババババババババババツ

私の目から放たれたビームは、不規則に広範囲と放たれていく。そしてビームの調節が鍵となる。

今の私は先程の戦闘で多少のエネルギーを使っている為にエンプティイが心配される。今私の身体を動かなくなれば…地面のキャンバスにぶちまける事になるだろう。その為に加減をした放射が必要とされた。

ババババババツ

落ちる速度が遅くなるのと合わせて、ビームも弱めていく。私の貯蔵を確かめながら。

残り10m。

ここまでくればビームは必要ないだろう。

バアアツ!!

最後に少し強めのビームを撃ち出し、落ちる速度一旦無くしてから身体を変え脚側を下にする。再び迫り来る地面に、足に意識を集中させた。

そして、私の足が地面に着いた瞬間。

クルンツ

身体を左に転がるように身を丸くして受け身をとる。腕が無い私には5点着地は

出来なくとも、着地の衝撃を分散する事は出来るのだ。そして、キメポーズ。

シャキーン

ふうっ。とりあえずは難は去ったな。

ドオオンツ！

少し離れた場所に私が乗っていたロボットが落ちてきた。殆どオシヤカになってしまったが…仕方あるまい。そもそも燃料が無いとロボットは動かんだ。ならば捨てるに限る。

うん、とりあえずロボットが持っている赤いのを食するか。

さて、この後はどうするかな？ あ…どうせだからオシヤカになっちゃったけど、返しますかなロボット。

あの戦場から余り離れていないようだし、狼煙でも上げて回収させるかな。

一先ずは…エネルギー補給エネルギー補給。

## ★☆☆☆☆

「では、ここからは篁中尉に説明を」

場所はアラスカ・ユーコン基地。そこでのブリーフィングルームでX F J計画の関係者達とソ連軍のジャーナル大隊の者達が集められていた。

「今話す事は私の…私ともう2人の話だ。虚言だと思ふなら構わない、だが今虚言を言う必要性も無い…あれは三年前の話だった」

篁唯依は、ブリーフィングルームにいる全員にあの時の事を話した。日本帝国で訓練生の時を。唯依自身が見た事を、体験した事を。そして『あの』光線級と出会った事を。

「…これらが私と光線級の出会いだった」

シーン

唯依の昔話に聞いていた人間はリアクションが取れていなかった。それもその筈、中にはBETAの中に奇行種がいると噂話で聞いていたが本当に存在しているとは考えられなかった。

スツ

1人の少年が挙手した。

「なんだ？ 少年」

「俺の名前はキール、ジャール大隊の1人だ。そして『あの』光線級に助けもらった1人だ」

XFJ計画の人間達は驚く声が漏れる。少年は前回の戦闘で光線級に助けられた衛士のキール。彼は座っていた椅子から立ち上がり、唯依に質問した。

「何故、『あの』光線級は俺を助けたんだ？ 意味がわからねえよ、BETAって名前自体に矛盾してねえか？」

「ああ、確かに。『人類に敵対的な地球外起源種』でBETA。だが、『あの』光線級は別らしい。そして『あれ』の名前は他の光線級と区別する為に上の人間が名称を決めた。『ルクス』だ。目的などは不明だが、私の方でも調べて見たが人類を襲う事なく…逆に守ってくれる亜種だ」

「では、『ルクス』は何故私達が乗っている戦術機に乗れるのだ？ あれは乗っていると

言えるのかはわからない」

ジャーナル大隊隊長であるフィカーツィア・ラトロワが会話に参加する。女性としては長身で、髪は長く後ろ髪は結んでポニーテールになっておりロシア人である。

「…詳しくはわからないが、ルクスは学習能力が異常に高く他の戦場でも目撃情報がつている。その時に私達が乗る戦術機に興味を持ったのか、戦場に残留する戦術機でも触れたのでは無いかと思う」

色々と常識から外れた話が上がリ、再びブリーフィングルームは沈黙が広がる。それをを見て唯依は、ルクスの情報を映像に映す。

「ルクスは、他の光線級とは脚の形状が人に近い。それもアスリートのように筋肉質で指は二本ではなく五本。その為か…機動力が高く縦横無尽に動き、光線級の弱点であるレーザーの照射の際に動きを止める動作が無い。両目での照射だけでは無く、片目で調節した撃ち方もルクスは熟す。」

そして、戦車級を軽々と蹴り飛ばす強靱な脚力。

この能力が他の光線級に無く、ルクスだけが持っている能力とも言えるな」

ルクスの情報を上げて行く度に、それを見た人間達は冷や汗を流す。ルクスのようなBETAがいれば、今頃は人類は敗北を約束されているだろう。今の現状でも質量で負けているのだから。

「…話が長くなってしまったが、本題に入ろう。今回集まってもらったのは…また私達の前に現れた時はルクスを捕獲、いや保護してほしい」

「「「「!?」」」」

X F J 計画に所属しているアルゴスチームは全員が立ち上がり驚愕し、ジャーラ大隊達も同じ反応だった。

「おい、中尉！ あんたが何を言っているのか解ってるのか!? B E T A を捕まえるなんて」

アルゴス一のユウヤ・ブリッジス少尉は、ブリーフィングルームにいる人間達の代弁するような言葉を唯依に叩きつける。

それもその筈、敵であるB E T A を殺さずに捕まえると言っているのと変わらないのだから。ユウヤ・ブリッジスの言葉を聞いた唯依は、ゆっくりと頭を下げて行く。

それを見た全員が驚いた。

「確かに無理難題な事と理解している。だが、私はルクスを試して見たいのだ。本当に敵対しない存在なのか…手を取り合う事が出来るのか。

私はB E T A に勝つ勝率を少しでも上がるなら、この身を捨てても拾いに行く。

それほど我々は攻め込まれているのだから…。大地や空、故郷などが奪われ大切な人を殺され…蹂躪され続けている。そんな存在の1つに例外が、私達の光になるかも



聞かされていた者達は、唯依の行動に驚かない訳が無い。

「あれは日本帝国の重要な兵器では無いのか？ それをおいそれと他の国に渡しても構わんのか、篁中尉」

「確かにあれは簡単に他国に渡してしまえば、今の私の立ち位置は危ういだろう。だが、兵器よりルクスの方に価値があればどうだ？ 聞いた話では、あの電磁投射砲は量産の目処が立たないと開発部が言ってるらしい。」

ならば、確かに大量にBETAを倒せる兵器だが精密機械の為に不慮の故障などで突然動かせなくなれば……ただの屑鉄だ。ならば、私はルクスに賭けるのだ」

頭を上げ自分の言葉を全て吐き出して行く唯依。先程と変わって何処か修羅の道に挑む修行僧にも思わせる気迫を放っていた。

それを見たラトロワは、愉快そうに笑い始めた。

「あははははははっ！」

ラトロワの心の底からの笑いに、ジャール大隊の少年少女達は呆気に取られていた。普段のラトロワは、物静かで厳しく時に優しいジャール大隊隊長である彼女があんな笑い方をするのは初めて見るからだ。

少年少女達に見せる母親の様な微笑む笑いでは無い、彼女自身が目の前にいる篁唯依の覚悟を認めた為に笑ったのであった。

「面白い賭けだな、篁中尉。私も全てベットしてもいいか？ その賭けに」

「ふっ、負ければ何もかもが失ってしまいますが？」

「賭けずにチップを取られるだけの勝負は面白く無い。ならば、身を削り勝利をもぎ取るだけだ。それにルクスは、私の子供達を助けてくれた奴だ。礼の1つ送らんな」

清々しいほどの笑みを浮かべるラトロワは、唯依に近づいて右手を差し出す。それを見た唯依も笑顔でラトロワの右手を握手で答えた。

こうして：アルゴスチームとジャール大隊は同盟が組まれた。

★☆☆☆☆

同じくユーコン基地で、白人が個室で外部との連絡をとっていた。

「ええ…確かに帝国が作り上げた兵器は凄まじいとの言葉しかありませんでした。ですが、それよりも…」

『サンダーク中尉、君の言いたい事は分かるよ。あのBETAの事だろう』

長身で髪はオールバックで金髪の男、イエジー・サンダークが通信機器を使つて会話していた。

『…少し聞いた事がある。極秘である計画で人間がBETAを使つて何かをしているらしい。それが使われるのが人かBETAなのかは分からないがな』

「ロゴフスキー中佐、良い案があります。あのBETAと帝国の兵器を手にすれば戦況は、確実に我々の有利になるでしょう」

『簡単に言ってくれるな…確かに人を助けるBETAが味方になれば心強いだろう。』

しかし、所詮はBETA。下手な事をすれば敵に回ってしまうかもしれんぞ?』

フツと笑うサンダーク。

「あのBETAに関しては、良い案があります。私の部下であるイーニャ・シエチナを使うのです。彼女なら、あのBETAと交信する事が出来るはず。そうすれば…あのBETAの考えなど手を組む事が出来る筈」

スカレットツインの通り名をもった2人の衛士。クリスカ・ビャーチエノワとイーニャ・シエチナである。彼女達が乗る戦術機『チエルミナートル』は複座式で2人が操縦している。

そして、彼女達は作られた人間であった。ある計画により作られ、調整され今は衛士としてサンダークの部下になっている。

その1人のイーニャ・シエチナには少し他の人間には無い能力が付与されていた。それを知るサンダークは、ログフスキーに持ちかける。

「どうですか？ 中佐も知っている通り、計画から生み出された彼女ならあのBETAと交信出来る筈と」

『……。失敗は許されないぞ？』

「フツ、解りきつている事です」

こうしてルクスを求めて動く人間が増えた瞬間だった。



深夜、月が昼の太陽のように大地に光を降り注ぐ。　その中で人間は夜になれば寝に入るのは当然の行動。

ユーコン基地の施設に設置されたベットに寝ている篁唯依は魘されていた。

突撃銃の発砲音、金属がひしやげ音、肉体が引き裂かれる音など様々な音がする中で…共に戦った彼女達の声が聞こえてくる。

助けて

早く

痛い

お願い

唯依 イイ イイ ツ!!

「はっ!?! ……ツ、はあ……ツ」

悪夢を見たかのように飛び起きた唯依。

息を切らし冷たい汗が全身を濡らしてい

た。

(……………)に来て、あのような夢を見るとは。それもそうか……私は弱い人間なのだから。

それにしても、不可解な遠征に今では不完全な機体……ソ連軍であるサンダーク中尉の不自然な動きも見える。問題は山積みか……)

唯依は弱り切った心境の中、枕元に置いてある父親から貰った懐中時計を握りしめる。

「……父様、私は……どう……すれば。お前なら……どうするんだ。

ルクス」

唯依の声は、静かに暗い部屋に消えていった。

「では、篁中尉はルクスに対して……どのようなコンタクトを取ろうとしているのだ？」  
「ああ、それに関しては次にBETAの進軍に掛かっている」

ユーコン基地のハンガー内で、唯依とラトロワは話していた。

「私の考えでは…ルクスは他のBETAがいる場所が解っているのでは無いかと思っ  
ている。様々な目撃情報では、殆どが我々とBETAとの交戦している時に出現確率が  
高いと見ている」

「ふむ…」

唯依の言葉に考え込み、腕を組むラトロワ。

「それが確かな情報なら…なぜ、私を此処に呼んだ？」

「それはルクスを誘き出す作戦には、私達が協力しなければならぬからだ」

一機の戦術機に近寄る唯依。それを眺めるラトロワ、唯依の考えが読めず溜息を吐く。

「それはルクスを捕獲する件で手を組んだ筈。それとも、お前は私…ジャール大隊を  
疑っているのか？」

「違う、ルクスは他のBETAとは違い知能が高い。それを予測して次の戦場に現れ  
れば…必ずと言って最善な行動を取るだろう。」

現に前の戦闘では、ジャール大隊の少年兵を助けては戦術機を操り被害を抑えている  
のだからな」

「……」

「次の戦闘でルクスを確認した瞬間に、ルクスの前に無人の戦術機を運び出す。そうすれば：奴は再び乗り込むだろう」

唯依の話は、他の軍人が聞けば頭が可笑しいと思うだろう。態々、人類の敵対するBETAに自分達の武器を渡すのだから。

しかし、ラトロワは決して笑わずに腕を組んだままで目を瞑り考え始める。少し悩んだのかラトロワは片目を開き、唯依に問いかける。

「その為に：コックピットを解放させた戦術機一機を代償か。だが、悪い話では無いな。実際にルクスの操縦には驚かされているからな」

ルクスの戦い方には、彼女達には真似るには難しいものだった。

それは状況把握能力。彼女達、衛士は戦闘中では通信を使い状況を伝い合い戦況を変えらるもの。しかし、ルクスは単独で周りの状況を把握しきっていた。

先の戦闘データを見た人間を驚かすほどに、自分の位置・他の戦術機・BETAの数や配置などを理解し把握して動いていたのだ。ましてや、電磁投射砲の射線上にいる動けない戦術機や戦車などの味方達を迅速に回避させているのだから。

「この私達の行動により、ルクスには我々が味方であると理解させる事が重要。少しでも：手を取り合う必要の手段とも言える。その為に、この機体をルクスが発見され次第にジャーナル大隊に運んでほしい。その為にラトロワ中佐を呼ばせてもらった。」

アルゴスチームには、他にやってもらい事がある為に回せないのだ」

「…ふむ、よろしい。ならば、その役目引き受けよう。大博打な作戦だが…面白いと思う」

ラトロワの返答に、やっと顔の力が抜ける唯依。それを見たラトロワも表情が柔らかくなる。

無言のまままで2人はハンガーから外に出て、雲一つ無い青空を眺める。

「奴は来ると思うか？」

「ルクスなら必ず…」

「そうか、後は頼りない神でも祈っておくか」

「神に祈るぐらいなら、私はルクスに祈るがな」

小さく笑い合う2人。一体のBETAにより、人と人を取り合う事になるとは誰も思っていないかったであろう。

一つのイレギュラーが、良い方向にも悪い方向にも傾く事がわかった瞬間であった。

希望に満ちた糸、その色は…

希望に満ちた糸、その色は…

基地の通路を歩き、目的地に向かう男が一人。

カツカツカツカツ

頭髪は黒でパツと見れば日本人のような顔付き。そんな彼は米国人と日本人のハーフである。その為か幼い頃に辛い思いをした所為か…日本の関する事が苦手であった。

しかし、彼は彼女と出会ってからは少しずつと苦手意識は薄れて行く。心の奥では…まだ溶けていない氷がある為か自分の事は日系米国人と言う。

「はあく、これから作戦と言うのに呼び出したと。中尉は何を考えているんだ？」

彼の名はユウヤ・ブリッジス。『X F J 計画』の首席開発衛士として不知火・式型に

搭乗する事に。 そんな彼は呼び出した張本人がいる場所に向かっていた。

プシュー

「入るぜ、中尉」

「待っていたぞ、ブリッジス少尉。 話なんだが…これを見てほしい」

唯依は呼び出したブリッジスが部屋に入ってくるなり、彼にある映像を見せた。

それは前の戦闘シーンであった。

「これは…」

「ああ、あのBETAであるルクスの戦闘記録だ。 それをブリッジスに見てほしいと

思ってた呼んだのだ」

そう言われたユウヤは、何故自分にあのルクスの戦闘記録を見せるのかは疑問しか無かったが取り合えず見る事に。

(…なんでBETAであるのにも関わらずに、ソ連の戦術機を乗りこなしている。 それも衛士を庇いながらも的確な動き…周りの状況把握。 本当にBETAなのか)

彼は自分なりに戦術機の操縦スキルには自信があった。 だが、目の前に映された映像に少しずつと何かが崩れそうになっていた。

そんな彼の表情を見た唯依は、試すように話しかける。

「少尉、これを見て感想をくれ」

彼女の言葉にユウヤは少し考えて、自分なりの感想を答えた。

「…取り合えず言える事は、スゲエと言う一言だ。BETAであるのに戦術機の操縦、戦場の状況を把握しつつ良い方向に持って行く勘と言った所だな」

ユウヤの感想に唯依は、少し問題を出す。

「では、ルクスの操縦に何か気づく点は無かったか？」

(…?)

そう言われたユウヤは、何度かルクスの戦闘シーンを眺めている。

すると、何か理解が出来ない点を見つけたユウヤ。

(なんで機体自体が傾いているんだ？ それに片足で立って…OBWシステム《オペレーション・バイ・ワイヤシステム》を無理矢理に抑え込んでいるだど!?)

戦術機は、衛士に操作され動いている。しかし、衛士の操作は本当に戦術機を動かすだけなのだ。

それを補うための物が、戦術機を安定させている《オペレーション・バイ・ワイヤシステム》なのだ。

人間の操縦を直接駆動系に伝えるのではなく、途中にコンピュータ処理を介在させるシステムであり…コンピュータは人間の代わりに機体を細かく制御し、転倒などの意図しない動作を防ぐと言う代物なのだ。

「その為、戦術機は地面に足をつけてる時は両足なのが当たり前なのだ。

その常識を覆したのがルクスであった。

「コイツ、態と機体を跳躍ユニットを片方だけを少しだけ使って片足立ちを維持していやがる！」

「そうだ、ルクスは戦術機のOBWシステムを無効化させている。その理由が、このルクスの戦い方に合わないらしい。

そして、ルクスの戦い方は比較的に人間的で合理的な動きをしている」

格闘技をやっている人間なら少しながらも理解出来ると思うが…立っている体を後ろに振り向いたりする時はどんな動作をしているか。

格闘技を未経験な人間は、二歩三歩と足を動かして後ろを向くであろう。

多少なりとも格闘技を知っている人間なら…一動作で後ろに振り向く事が出来るであろう。

左周りなら左足を軸に、右周りなら右足という形に。無駄に動作を行わずに、一つ

の動作で行えば動きは省略されて素早く振り向ける筈。それを戦術機で実行するルクス。

どうしても戦術機を動かす際に、プログラムされたパターン化した動きになってしま

う。何故か、人間は脳から直接身体に信号で送ってから命令した部位を動かすが戦術

機は限られた操作しか出来ない。

限られた操作には機体の姿勢制御は無かった。その為のOBWシステムだった。

「ルクスがOBWシステムを理解しているとは思わないが、自分なりに扱いやすくする為にあの姿勢にしているのだろう。」

後は、あの戦い方には長期戦にはうってつけだな」

「何でだ、中尉」

「見ての通り、ルクスの動かし方は特殊だ。片方ずつと跳躍ユニットを使い、推進剤を節約が出来る。下手な動作も無く：最小限に留められた動き。これは今までに無い戦術機の操縦方法だ。」

これをブリッジス少尉に真似て欲しい」

「はあっ!？」

「ルクスの動きを今すぐやれとは言わない。次の戦闘でルクスには戦術機である高等練習機《吹雪》に乗せるつもりだ。少尉が乗っている不知火の直系である吹雪：ルクスなら乗りこなすだろう。」

そしてルクスを作戦中の間は、少尉に観察をしてもらう。それを見て覚え学べ。

奴の動きには不知火には必須とも言える」

余りの唯依の言葉にユウヤは啞然としていた。それもその筈、確かにルクスの操縦方

法は今の戦術機には無いがBETAのやり方を真似るのは前代未聞なのだから。

「なんで俺がBETAの真似事を！」

「…なんだ。ブリッジス少尉にはルクスの操縦を真似る事は出来ないかと？ BETA

であるルクスはこなし、人間である少尉には出来ない…そう言いたいんだな？」

「!?…」

唯依の言葉にユウヤは身体を震わせる。彼の中では怒りの感情を巻き起こり、自分のプライドをかけて唯依に言う。

「上等だ!! BETA如きがやった操縦なんて簡単にこなしでやるよ! 舐めんな中尉!!」

ユウヤはそう言って部屋から出て行った。部屋に残る唯依は、少し笑いながらユウヤの後ろ姿を眺めていた。

「ふっ…煽り甲斐のある奴だ。期待してるぞ、ユウヤ」

唯依の表情は柔らかく、揶揄った少女のような物だった。



ザアアアアアアアア

基地のシャワー室で水が流れる音が鳴り響く。そこには一人の女性がお湯を浴びていた。すると十代半ばの小柄な体型で栗色の髪を持った少女が入ってきた

「中佐、ご一緒してよろしいですか?」

「ああ…構わんよ」

「…失礼します」

先にシャワー室にいたのはフィカーツィア・ラトロワだった。後から入ってきた少女は、シャワーを浴びる事なくラトロワの近くに寄っただけだった。それを不信と思つたラトロワは少女を話しかける。

「……どうした、イヴァノワ。シャワーを浴びに来たんじゃないのか?」

彼女の名はナスターシャ・イヴァノワ。ラトロワの副官を務める精強で有能な衛士

だった。十代半ばの少女でありながら大尉の階級を持つている。

「中佐…一つ。お聞きしたい事があります」

「言ってみろ…」

ナスターシヤは、自分の思いをのせてラトロワに聞いた。

「中佐は…なぜあの様な作戦にのったのですか？」

「なんだ、そんな事か」

「部下達も不思議がっています。何でアルゴス試験小隊と手を組んでまでする事なの

かと…」

「大した話じゃない、BETAであるルクスを味方に出来れば大きな戦力になると考え

ただ」

「はぐらかそうとしないでください。中佐がそんな希望薄い物に賭けようとしている

のか。それだけの理由で私達は信じると思えますか？ BETAを味方に出来ると

思う事を…」

「…いや思わないだろうな」

ナスターシヤは少しずつと仮面が取れて行く。彼女ナスターシヤにとつてラトロ

ワの存在は母親と思う面がある。それが大切に思う人間が、自分では考えられない事

をしようとして不安がっていた。

「中佐……中佐は何故、あのBETAにそこまで気にするんですか？ あいつに何があ  
るって言うんですか？」

それを聞いたラトロワは、ひとまずシャワーを止めナスターシヤの方に顔を向ける。

「……あれに興味があるのは認める。で、どうした？ それが気に入らないのか？」

「はい、気に入りません。あのBETAに中佐が興味を持つ程の価値があるなんて思  
えませんか……！　なんでそこまでして中佐はあのBETAを思うんですか？　部下  
達もみんな……不安がっています……っ!!」

目に涙が溢れそうにするナスターシヤ、それを見てラトロワは自分の思ってる事を話  
す。

「すまなかつたな……『ターシヤ』」

『ターシヤ』とは、ラトロワがナスターシヤの愛称呼びなのだ。そしてラトロワはナス  
ターシヤに近寄り、優しく抱きしめる。

「大丈夫だ……私はお前達のものだ。ターシヤは聞いたな？　何故、私はルクスを気に  
かけているのかを。」

それはルクスなら私達を守ってくれる存在になってくれるかもしれないからだ。実  
際にキールは奴に助けられた。BETAに関わらずにだ……私は怖いのだよ。戦闘  
では何があるかは予想も出来ない、お前達を失うのは本当に悲しいと思う。

だから、私は剣と盾を欲しがったのだよ。      ルクスと言う武器をな…」

「……………」

ラトロワの気持ちを聞いたナスターシャは、自分達がどれだけ大切に思われているのかを理解した。確かにBETAとの戦闘では何が起きるかは予想も出来ない事から、死んでいった衛士達は少なくとも無い。

ラトロワもその事には心を痛めていた。      だから、キールを助けたルクスに興味を持ったのだ。

「…中佐、ありがとうございます。      嬉しいです…そこまで考えての事だなんて」

「だから、ターシャ。      お前に任せられた任務…必ず達成させてくれ」

ラトロワとナスターシャは一度離れ、お互いに目を合わせる。      そして、ナスターシャは良い表情で返事をする。

「はいー」



テクテクテクテク

ふいゝ、今私は何処を歩いているんですかね？

あのロボットが墜落してから何日経った事か。歩けど歩けど似たような地形の所為で何処を歩いているのかも分からない状態であった。

最近は何物達の気配も無く荒れた平地を只管に歩き続ける日々。

暇と言うか…疲れはしないけど歩くだけの日々も苦痛ですな。

そんな愚痴を発声器官も無い身体では、内心で思うだけになってしまう。そんな事を思っている一本の触手がビビツと反応する。　そんな事

その触手が反応した方向から、何か違和感を感じた。　前の戦闘も、この違和感を感じて向かったら戦場になっていて化物達を発見する事が出来た。

長い間にこの身体で生きてきて、また少し感知能力が上がったのかね…

そんな事を考えながら私の足は、違和感を感じる方向に向けて走りだすのであった。

化物ゝ、待ってろー！　私の暇潰しにさせてくれるぞー！

私は後ろに土煙を舞い上がらせながら、大地を爆走していくのであった。

★★★★★

ソビエト社会主義共和国連邦・コリヤーク自治区。 西海岸部BETA再上陸地点。  
ガガガガガッ

『撃てーッ!!』

ドンッドンッドンッ

唸る突撃砲と戦車の砲台。 海から上がってきたBETAを殲滅していく人類。  
BETAの血肉はぶちまけられ、大地を赤く染めていく。

『はっはー！ 見てみろよ、まるでぶちまけたボルシチだぜ!!』

『喜んでんじゃねえよ、バカ!』

ソ連の戦術機《チエルミナートル》は、次々と海から上がってくるBETAを殲滅していく。

そこに戦術機内で通信が入る。

『ジリエージーより各機。我々の任務はルクスの誘き出しに奴を戦闘させる為に、適量のBETAをお届けする間引きだ。決して全滅させるなよ?』

『了解ッ!!』

向かってくるBETAを再び殲滅にかかる数機の戦術機が戦場を駆ける。

南地区、統一中華戦線。 暴風（バオフエン）小隊試験戦域。

そこには統一中華戦線が誇る戦術機《殲撃10型》が配置されていた。その部隊の隊長である『崔亦菲』（ツイイーフェイ）、韓系の人間で中国と台湾のハーフ。髪色は緑で鈴が付いたヘアゴムでツインテールにセットしている。

「バオフエン１より各機。これより起動近接格闘戦能力のテストを行う。フォーメーション・アローヘッド２にて戦域に突入。B7群から片付けるぞ！全機発進ッ！！」

『了解ッ!!』

各機の殲撃10型が背中にマウントされている77式近接戦用長刀を、可動兵装担架システムを使い装備する。そしてもう片方には、82式戦術突撃砲を持ち戦闘に入る。

（この前はあのレールガンと亜種のBETAに後れを取ったけど…近接戦なら、この殲撃10型に敵う機体などあるものか！）

巧みに殲撃10型を操り、要撃級を77式近接戦用長刀で切り裂いていく。

「バオフエンの名を轟かせろッ！日帝の度肝を抜いてやれッ!!」

北区ソビエト連邦イードル小隊試験戦域。

其処には一機の戦術機だけでBETAを殲滅していた。夥しいBETAだった肉

片と体液が撒き散らしていた。

ピピッ

『CP（コマンドポスト）より。イーダルー、戦果は上々だが戦闘起動に無駄が多い。遊ぶのも程々にしろ』

戦術機『チエルミナートル』のコックピット内で通信が入る。

「イーダルー、了解」

「クリスカ、おこられちゃったの?」

そのチエルミナートルには、複座式により2人の女性衛士が搭乗していた。彼女達は2人で『スカーレットツイン』と言われている。

イーニャ・シエスチナ、小柄な体型で薄紫な色を持った髪は腰以上に長い少女。

クリスカ・ビヤーチエノワ、女性として長身な体型にイーニャと同じく薄紫な髪色に肩にかかるほど長さ。イーニャは垂れ目に対して、クリスカはツリ目に近い。そんな2人は巧みに戦術機を乗りこなし、他国の衛士より頭一つ分の戦闘力を見せている。

「もう少し楽しみかけたけど…早く片付けましょう」

チエルミナートルの腕から展開された近接武器を収納して、背中にマウントされた突撃砲を装備する。

「とつげきほうって、あんまり面白くないよね」

「そうね、でもこの方が早いから。 10秒くらいかな」

そしてスカレットツインは、残るBETAを殲滅する為に戦場を駆ける。

西地区国連アルゴス試験小隊試験戦域。

「オラオラオラオラアツ!!! こんのおおおつ!!!」

「消えろ、タコ助供ッ!」

そこでは二機の戦術機『F-15ACTV』アクティブ・イーグルが戦場に赤い華を咲かせていた。見事な連携に射撃や近接戦闘で次々とBETAを葬って行く。

アルゴス試験小隊の1人、タリサ・マナンドル。チームの中では最年少でネパール陸軍の少尉であり、勇猛な山岳民グルカ族の出身。肌は褐色で髪は長すぎず小柄な体型、陽気で口が悪く喧嘩っ早い所が短所と言えるだろう。しかし彼女は仲間思いな所があり、仲間の事になると感情が出ると言う感情家。

それには理由があり、BETAの進行により故郷を奪われ親しい仲間達を失った所為

かもしれない。

アルゴス試験小隊の1人、ヴァレリオ・ジアコーザ。見た目は長身で髪はバンドマンのように伸ばしており、性格はラテン系特有な軽いノリの典型的なプレイボーイな所があるが面倒見が良い。

他の人間からは『VG』と呼ばれ、高い機動制御や状況判断能力など実戦で生き残ってきた実力は本物のテストパイロットである。

彼もBETAに故郷イタリアを奪われている為に、BETAに対しては激しい怒りを持っている。

「…すげえな。あいつらの近接戦起動と連携…実践と演習とではまるつきり別物じゃねえか」

「そう感じる余裕が出来ただけ、あなたも成長したって事よ」

ユウヤは後方で2人の戦闘を見て感心していると、彼と一緒に待機している仲間がユウヤを褒めていた。

アルゴス試験小隊の1人、ステラ・ブレイメル。短めな髪は金髪でおっとりとした顔つきでモデルのような身体付きしていた。チーム中では的確な判断力と高い狙撃能力を持ち、サポート役にしては適材適所な人材。

柔らかい性格な反面、VGなどのセクハラな悪戯には静かに笑いかけて容赦の無い鉄

槌を下す。

『なんだあ？ まあた、突っ立ってるだけか？ ご自慢のレールガンはどうしたんだよ？ お家に忘れてきたの？』

『どうせ飛び道具がないから、ビビってるんだろ？ 近接戦を仕掛ける度胸がねえんだよー！』

『…キール、無駄口を挟むな。 耳障りだ』

ユウヤとステラ以外にも、ジャール隊のキールとナスターシャが其処にはいた。

キールはユウヤに喧嘩を売るような言葉を吐いていたが、それをナスターシャが止める。

ジャール隊の二機の間には、『吹雪』

が無人で持ち出されていた。 この戦闘では、ある作戦が実行されていたからだ。

ルクスは人間とBETAが戦う場所に現れるのは、過去の記録から推定済みの為に唯依の考えた作戦により吹雪を持ち出されている。

未だルクスの姿は発見されていないが、確認され次第でルクスに吹雪を届けるのがジャール隊の2人の役目だった。

すると4機のコックピットに通信が入った。

『ジャール隊及びアルゴスチーム。 ルクスの姿を確認。 作戦を実行！』

「『!?』」

基地からの連絡により、尽かさずジャーナル隊は吹雪を両脇を担ぎ運び出されて行く。それを無言で眺めるユウヤだった。

☆☆☆☆

ゴオオオオツ

二機の戦術機は一機の戦術機を運んでる最中だった。

「あのよ、ナスターシャ」

「どうした？」

「ルクスに渡す前に、俺機体から降りてあいつと面を合わせてえんだが駄目か？」

突然なキールの言葉に、ナスターシャは一瞬身体を硬直する。それもその筈、生身でBETAの前に立つのは自殺行為に等しいのだから。

だが、ナスターシャは深い溜息を吐きながらキールの願いを聞く。

「…ルクスが貴様に敵対する気配があつた時は手を出させてもらう」

「サンキュー！」

そうして2人は荒野を爆走するルクスを発見するなり、ルクスの手前に機体を下ろす。そうして、人間とルクスが落ち着いて顔を合わせるのは二度目となった。



荒野を爆走している私。 少しずつと化物達がいる場所に近づいている事を理解しながら走っていると、前の方から三機のロボットが飛んできた。

：いや、一機は運ばれているな。 コックピットも開かれて無人だし：故障でもしてるのかね？

そんな事を考えながら走っていると、三機のロボットは私の向かう進路上に下りてきた。

はて？ 何故私の向かう先に下りたのだろう。 まあ、いいか。

私は三機のロボットを避けるように少し横に逸れようとすると、一機のコックピットが開き中から少年が降りてきた。 これには私は驚いた。 今まで私の前に人間が立つのは、助けた時か幼い子が好奇心で近寄ってくるだけだったのだ。 だが、少年は機体から降りて私の事を見ているのだ。

怯えず怯まず：怖がらずにだ。 そんな彼を見て私は少しずつと走る足を緩めていき、ある程度の距離を図り止まった。

あの少年は：この前ロボットから出した時の子だね。

少しお互い面を合わせていると、少年の方から私に近づいて来るではないか。 そんな少年の行動に驚きながらも、私は彼よりデカイ身体を低くする為に片膝を着く。 するともう一機のロボットが武器を構えようと一瞬したが、私の行動に敵対する動きでは

無いと解ってくれたのか自然体に戻ってくれた。

そして少年は2、3歩しかない距離まで近づき、右腕を振り上げ私の首？部分に向けて殴ってきた。

ボム：

私の身体は柔らかい方だから、少年に殴られても痛くない。しかし、彼の行動は理解できない。そして彼は殴った際に下に向いて顔を上げた。その顔は子供特有な幼く柔らかい笑顔であった。

『あの時助けてくれてありがとうな！』

彼の言葉は私の聴覚では理解出来ないが：唇の動きが読唇術で彼が言っている事が理解できた。

今までの無い事に私は考えられず動けないでいた。この姿になって、数えるのも止めたほどの人間を助けたつもりだった。しかし、誰もが私を見て怒りや恐怖などの負の感情しか無かった。

：あの子だけは一度は怯えたけど、話しかけてきたなあ。

前に助けた三人の少女の一人を思い出した。彼女も私と面を合わせて話しかけてきた貴重な人間だったのだから。まあ、途中で邪魔が入ったけどね。

だが、少年は私に笑いかけて礼を言ったのだ。私にも心を持っているのであろう。

胸？の奥から暖かいものが身体全体に広がっていくような感覚になった。やはり私のやってきた事は間違っていないかったと。

良かった…間違っていないくて。

嬉しくなった私は無意識に、一本の触手を彼の頭にのせて撫でた。細い触手であるが、私は彼の頭を撫でていると少年は私に向かって話して来る。

『やめろよ！』

そんな言葉を言っているが、少年は私の触手を払う事なく照れていた。私の心が癒される中、少年は突如私の触手を握った。

『あのよ、お前にアレに乗って欲しい。そしてBETAと戦ってほしい』

BETA？

少年は私に説明するように三機が並ぶ真ん中のロボットに乗れとジェスチャーする。ふむ、私は『BETA』と人間に呼ばれているのか。そして化物の名前でもあると。同じBETA同士で戦うのは可笑しな事だろうが、私は私。彼のような人間を助けていくのが私の生きる意味だと思う。

君が私に戦って欲しいと言うなら戦おう。だから君のような人間が増えて欲しいと思うのは…私の我儘かな？

まあ、言われずとも私は人間を助けるけどね。よし、予め開けられたコックピット

に身体を入れ込み触手で操縦桿に巻きつける。

…装備は両手に刀に近い武器で、背中には遠距離武器と。中々良い感じじゃない

か。このロボットも前に乗った事あるし…。

さて、私の欲しい物が出来た事だし…化物改め私と同じ名前を持つBETAとやら。

お前達に赤い華を咲かせよう。

狂い咲け、一瞬の美しさを放つ為に。

そうして私は人間から授かったロボットを操り、BETAがいる方向に向かって行った。